

- 第3章 実験学校の開始から『学校と社会』の出版まで——1896年～1900年——
- 第4章 シカゴ学院の編入からデューイの教育学部長就任まで——1901年～1902年——
- 第5章 シカゴ大学教育学部の組織改革——1902年～1903年——
- 第6章 デューイとシカゴ大学教育学部教員団との対立——1903年～1904年——
- 第7章 プレイン・ホールの完成と新教育学部の出発——1903年10月～1904年1月——
- 第8章 デューイのシカゴ大学辞職の経緯——1903年～1904年——

あとがき

索引

本書の内容を概観することになると、第1章では、デューイがミシガン大学からシカゴ大学へ転任することになった経緯について、シカゴ着任の様子やハーパー（William Rainey Harper）学長の印象、担当授業等について、市内やパーカー（Francis Wayland Parker）のクック郡師範学校の訪問等から実験学校を開設の必要性やシカゴ大学を教育長など教育専門職の養成を目的とする教育学科構想について、そして実験学校開設準備と題しエイバー（Mary Alling Aber）夫人の教育論の紹介が扱われている。

第2章では、1896年1月からミッチェル（Clara Mitchell）という若い女性教師のもとで実験学校を開設したこと、実験学校での授業実践に関するデューイの教科の統合と相関という基本方針、実験学校の開設→実践をめぐるハイスクール教師であったマニー（Frank A. Manny）への書簡等が紹介されている。

第3章では、実験学校は開設当初からずっと財政問題を抱えていたこと、教育学科の整備拡充案（①教育理論の科学研究と高度な教育専門職養成のためには実験学校が不可欠であること、②中等教員養成のために教育学科と他の諸学科の改善が必要であること）、実験学校は順調に発展し1897-1898年度には組織体制を整えたこと、1898年度からは就学前部門を開設したこと、1899年11月には『学校と社会』が、1900年2月から12月にかけては『小学校記録』全9冊が相次いで刊行されたこと、そして1900年冬学期のバルクリー準教

小柳 正司 著

『デューイ実験学校と教師教育の展開

シカゴ大学時代の書簡の分析』

高浦 勝義（明星大学）

最近、デューイのシカゴ大学時代（1896年～1904年）の研究が盛んになりつつある。すなわち、彼がシカゴ大学に附設し、運営した実験学校の研究や彼が志したシカゴ大学教育学部構想に関する研究が量質ともに高まりをみせている。彼が残した実験学校の教育実践に関する資料やシカゴ大学当時におけるハーパー学長をはじめとする様々な人とやりとりした手紙等の存在や現物が明らかにになったり、あるいは入手可能になったりしているからである。

本書を執筆の小柳正司氏は、そのような研究のわが国におけるいわば草分け的な存在である。本書は、その本人が、「あとがき」にもあるように、この10年ほどの間、勤務先の鹿児島大学教育学部の研究紀要に「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について」と題して発表してきた一連の論文（2001年3月～2009年3月）を一冊の本にまとめた学術研究書である。本書の内容構成を目次を中心に紹介すれば、以下の通りである。

まえがき

第1章 シカゴ大学着任——1894年2月～1894年12月——

第2章 実験学校の開始と最初の6ヵ月——1895年6月～1896年6月——

授 (Julia Ellenn Bulkley) の辞職と 1900 年夏学期からのヤング夫人 (Ella Flagg Young) の採用等が詳細に分析されている。

そして、1900-01 年度からシカゴ大学時代の後半期が始まることになる」と著者はいう。

第 4 章では、パーカーのシカゴ学院をシカゴ大学教育学部 (The University of Chicago School of Education) として編入し、そこでの初等学校・幼稚園の運営と教員養成課程の運営はパーカーに任せ、他方デューイは教育学科 (Department of Education) の長として実験学校の運営及び中等学校 (サウスサイド・アカデミーとシカゴ手工学校) の指導を引き受けるとともに大学の哲学及び教育学科の主任教授を引き受けること、次いでブレイン・ホールの建設計画に端を発するジャックマン (Wilbur Samuel Jackman) との対立、1901 年 7 月からのデューイの大学附属中学校長 (Director of the University Secondary School) としての仕事の開始、1902 年 3 月のパーカーの急逝に伴う教育学部長の任命等が扱われている。

第 5 章では、パーカーの死後、教育学科は教育学部に統合され、このため実験学校や大学附属中等学校も教育学部の管轄下に入ることになり、このため従来の大学附属小学校と初等教員養成を専らとした教育学部の組織改革が必要となったことを前提に、その過程で教育学部主監のジャックマンの教授会自治の原則、二つの小学校の統合問題、教育実習、上級学生向けの特科コースに関する案とデューイの概ね賛意の対応、初等教員養成中心から中等教員養成を含む 4 年制の初等・中等教員養成カリキュラム改革、大学附属中等学校の再編とカリキュラムが取り扱われている。

第 6 章では、1903 年 4 月から 5 月にかけて大学附属小学校と実験学校をめぐって生じたデューイと教育学部教員団との対立とブレイン夫人の調停、さらにハーパー学長による裁定という一連の経緯、さらにそれ以後生じた教育学部の運営をめぐる、主にジャックマン氏との対立が取り扱われ、これらを通してこれまでと違う攻撃的な性格の持ち主としてのデューイのイメージが浮き彫りにされている。

第 7 章では、1903 年 10 月の新学期からのブレイン・ホールへの入居と残されていた手工棟の完成後の 1904 年 5 月 14 日に落成式が行われたこと、ブレイン・ホールの施設・設備費及び部屋の配置、

グラウンドの整備について、また、教員養成カリキュラムや学部運営をめぐるジャックマン氏との確執等が記述されている。

第 8 章では、デューイのシカゴ大学辞職の問題が扱われている。先行研究ではデューイ夫人の実験学校校長職の扱いをめぐるハーパー学長の不誠実な態度が引き金であることが紹介されるとともに、本書の「より広い文脈」からは、①パーカーの死後、実験学校とシカゴ学院の小学校との統合がうまく進まなかったこと、②デューイ夫人の校長職問題、③デューイの教育学部長辞任の理由は、シカゴ学院教員団との対立により発展が望めないこと、④コロンビア大学からの招聘の話、⑤ハーパー学長のもとでは仕事は続けられないこと、どこかの大学等で管理職ポストを紹介して欲しいとするハリス (William Torrey Harris) への手紙等が扱われている。

以上が本書の内容の概観である。今日では「デューイ書簡集」全 3 巻が南イリノイ大学のデューイ研究センターから出されているが、「あとがき」にあるように、著者はその前から書簡に関心があり、この書簡を基にシカゴ時代 (1894~1904) の全般を描いているわけである。本書は、この意味からも「新たなデューイ研究」の最初のものであるといつてよいと思う。

本書と書簡を基にした研究紀要論文とを比較すると、本書では新たな小見出しが設けられたり、内容がやや拡大したりされている。しかし、本書にある内容でもともと研究紀要論文にない内容はない。もっとも、研究紀要論文にある写真等の資料は本書にはない。なお、本書の「あとがき」にある第 7 章は研究紀要第 59 巻の「第 3 節および第 4 節」ではなく、「第 3 節~第 5 節」である。

評者として関心の高かった実験学校のカリキュラムは第 3 章に詳しいが、「まえがき」にあるように、シカゴ大学図書館に保管の一次資料により既に別論文がある (鹿児島大学教育学部研究紀要一教育科学編一第 50 巻、1999 年 3 月、第 51 巻、2000 年 3 月)。このため、詳細はそれに譲ることにし、本書には、さらに当時のシカゴ大学教育学部の動きなどがおさめられ、書簡による補完部分の大きいことが分かった。

シカゴ大学辞任の理由に関しては、これまでの主にデューイ夫人の実験学校校長の扱いに対し、もっと「広い文脈」から取り扱われており (第 8

章参照)、興味深かった。書簡による分析の故であるといえよう。

なお、ことにデューイと第二次大戦後のわが国の教育とは関係が深いが、シカゴ大学時代との関係をどうみればよいか。また、彼の著名な教育関係書のほとんどは専らコロンビア大学時代のものであり、シカゴ時代にはないこと、またシカゴ大

学時代の教育実践はシカゴ大学時代以外にはみられないことがいわれているが、このいわば実践と理論の関係をどうみるべきか、デューイ思想の発展をどのように考えるか。これらの諸点の追究を今後期待したい。

(学術出版会刊 2010年3月発行 A5判 408頁 本体価格6,000円)